

# まえがき

日本語のオノマトペ研究の歴史は古く、音韻・形態面の特徴、品詞との関連を中心にした統語面の特徴、音韻・形態と意味の関連、文体的な特徴など、多くの観点から行われています。特に、オノマトペの基本的特徴である音象徴性と関連して、音韻面および形態面での研究が多方面から行われており、言語学だけでなく心理学の側面からの研究も盛んに行われています。近年は、味覚や触覚など感覚との関連で認知心理学や認知工学の研究も進んでいます。また、意味面での考察は、多義性を中心に擬音語と擬態語との関連、比喩、意味拡張に関して認知意味論からの研究が多く見られます。

このように研究が進む一方で、個々のオノマトペを取り上げて詳細に考察した研究は少ないようです。特に、意味面における個別研究は、さらに開拓される必要があると思われます。オノマトペの音韻と意味の関連を考察するには、オノマトペ全体の研究を進めるとともに、個別の事例を細かく見ることも必要であると考えます。オノマトペを一般化して捉えるだけでなく、個別の事例の特徴を詳細に検討することで、オノマトペの音韻と意味との関わりやオノマトペ生成の過程などの手がかりが得られるのではないかと思うからです。

本研究は、意味面の研究の立場に立ち、和語と漢語の関わりという視点か

ら、具体的に語義変化の実態を明らかにし、その変化の要因を考察したものです。本研究の特徴として、大きく三つの点が挙げられます。第一に、個々のオノマトペの語義変化を、類義語(意味面で隣接する語)や、同じ語基で語形の異なる語(形態面で隣接する語)、音韻の似ている語(音韻面で隣接する語)など、「オノマトペの周辺にある語との関わり」から明らかにしたこと、第二に、従来のオノマトペ研究ではあまり扱われなかった「和語と漢語の関わり」に焦点を当てたこと、第三に、複数のオノマトペの語義変化から、「共通する変化の要因」を考察したことです。

まず、オノマトペの語義変化の実態分析ですが、本研究では「まじまじ」「わくわく」「うっとり」「うっかり」を取り上げ、これらの語が周辺にある語彙と意味領域を分け合っていく過程を詳しく考察しました。調査対象としたのは明治・大正期の小説作品です。必要に応じて江戸時代の用例も参考にしながら、語義を分担していく過程を明らかにしました。

次に、和語と漢語の関わりですが、明治期の言文一致体の小説の中で、本文の漢語に和語のオノマトペの振り仮名をするという表記のあり方に手がかりを得て、考察を進めました。言文一致体の代表作『浮雲』を中心に、明治前期の小説が漢語(漢語系オノマトペ)によって和語の不足を補っていたことを見出しました。さらに明治後期の調査によって、俗語である和語系オノマトペが、漢語の助けを借りずに小説の言語として認められていったことを明らかにしました。また、「しんと」という和語系オノマトペが「しんしん(森々・深々)」という漢語系オノマトペとの関わりで生まれたのではないかと推測し、和語と漢語の関わりの深さを論じました。

最後に、変化の要因ですが、本研究で取り上げたオノマトペは、語義の縮小という点と、語義の移り変わる時期が明治30～40年代であるという点で共通しています。本来、オノマトペは言語音と意味内容との結びつきが強いことから、意味変化が起きることは矛盾するように思われるのですが、実際には、長い時代の中で語義変化を起こすオノマトペはいくつも見られます。本研究では、明

治・大正期において語義変化を起こしたオノマトペの例から、語義変化の要因を、近代の小説の語彙使用と近代的文章の成立という点から解き明かしました。小説の語彙に関しては、先に挙げた和語と漢語との関わりから検討しました。また、明治・大正期の文章表現の特徴を探るにあたり、中古から近代までの「泣く・涙」の描写、「笑い」の描写について、オノマトペを中心に描写の変遷過程を辿りました。近代に小説の語彙が漢語から和語へと移り、さらに、細密で正確な描写が目指される中で、オノマトペも意味領域を縮小し、語義が限定できるように変化していったのではないかと考えられます。

オノマトペは特徴的な語群であり、古くから語群の特殊性が指摘され、研究が進められてきました。たとえば名称についても、長い歴史の中で多くの各称や総称が提唱されてきました。昭和の後半までは「擬声語・擬態語」が一般的でしたが、やがて「擬音語・擬態語」となり、現在では「オノマトペ」という名称も一般的に用いられています。どの時代にも、研究者だけでなく、多くの日本人の興味を引く語群であったようです。もちろん、日本語を研究し学習する外国人の関心も高く、日本語の枠を超えた言語学的観点からも研究が進んでいます。他国語との対照研究や、認知言語学的研究など、幅広い領域で研究が進むことは、日本語のオノマトペ研究にとって非常に意義深いことです。その一方で、言語学的観点による研究と並行して、日本語独特のオノマトペのあり方を探ることも必要ではないかと思います。広い視点と詳細な視点、共時的研究と通時的研究、オノマトペ全般と個別のオノマトペ、という様々なアプローチをすることで、奥行きのあるオノマトペ研究になっていくのではないのでしょうか。

本研究は、日本語の特質である和語と漢語の関わりに目を向け、周辺語彙との意味の関わりという、従来の研究で重視されなかった新しい視点を取り入れた研究です。オノマトペの音韻と意味との関わりや生成の過程の手がかりを得るような資料となれば幸いです。

## 目 次

|            |     |
|------------|-----|
| まえがき ..... | (1) |
|------------|-----|

|                  |    |
|------------------|----|
| 序 章 .....        | 1  |
| 1 研究の目的 .....    | 1  |
| 2 研究の範囲と対象 ..... | 4  |
| 3 本書の構成 .....    | 5  |
| 4 用語・表記の解説 ..... | 10 |

|                                 |    |
|---------------------------------|----|
| 第1章 オノマトペの捉え方と意味に関する先行研究 .....  | 13 |
| 1 はじめに .....                    | 13 |
| 2 オノマトペの捉え方と名称の変遷 .....         | 14 |
| 2.1 名称の変遷 .....                 | 14 |
| 2.2 総称 .....                    | 14 |
| 2.3 各称 .....                    | 19 |
| 2.3.1 二種に分けるもの .....            | 19 |
| 2.3.2 三種に分けるもの .....            | 22 |
| 2.4 象徴性 .....                   | 23 |
| 2.4.1 一般語彙との境界 .....            | 23 |
| 2.4.2 擬音語と擬態語の境界 .....          | 24 |
| 2.5 現在の名称 .....                 | 26 |
| 3 和語系オノマトペと漢語系オノマトペに関する研究 ..... | 27 |
| 3.1 漢語のオノマトペの型 .....            | 27 |
| 3.2 日本語の中の漢語系オノマトペ .....        | 32 |
| 3.3 中国語との関連 .....               | 35 |
| 4 本研究で行う語義変化研究の立場 .....         | 35 |

|                               |    |
|-------------------------------|----|
| 第2章 小説作品に見るオノマトペの語義変化         | 43 |
| 1 はじめに                        | 43 |
| 2 オノマトペの多義の解消——「まじまじ」を例に——    | 46 |
| 2.1 辞書の記述と現代語の「まじまじ」          | 46 |
| 2.2 明治期の「まじまじ」                | 47 |
| 2.3 明治期以前の「まじまじ」              | 50 |
| 2.4 「まじまじ」の語義変化               | 53 |
| 2.5 「まじまじ」と「まんじり」             | 55 |
| 2.6 考察                        | 56 |
| 3 オノマトペの語義の縮小——「わくわく」を例に——    | 59 |
| 3.1 「わくわく」の現代の語義              | 59 |
| 3.2 「わくわく」の明治・大正期の語義          | 61 |
| 3.3 「わくわく」の身体性                | 64 |
| 3.4 「わくわく」の周辺にあるオノマトペ         | 66 |
| 3.4.1 明治・大正期の「どきどき」           | 66 |
| 3.4.2 明治・大正期の「うきうき」           | 69 |
| 3.4.3 プラス・マイナスの擬情語            | 70 |
| 3.5 考察                        | 72 |
| 4 周辺語彙との関連——「うっとり」「うっかり」を例に—— | 78 |
| 4.1 現代語の「うっとり」「うっかり」          | 78 |
| 4.2 明治期の「うっとり」「うっかり」          | 79 |
| 4.3 江戸期の「うっとり」「うっかり」          | 81 |
| 4.4 「うっとり」「うっかり」の周辺           | 83 |
| 4.4.1 「ぼんやり」「茫然」              | 83 |
| 4.4.2 「うとうと」「うかうか」            | 87 |
| 4.5 考察                        | 89 |
| 5 本章のまとめと考察                   | 94 |

|     |                        |     |
|-----|------------------------|-----|
| 補節  | オノマトペにおける音と意味の関連       | 101 |
|     | —— 隣接するオノマトペの意味の重なり —— |     |
| 1   | 本節の目的                  | 101 |
| 2   | 〈ポク〉系統のオノマトペ           | 102 |
| 2.1 | 意味分類と用例                | 102 |
| 2.2 | 語形による意味の重複と分担          | 104 |
| 3   | 〈ポカ〉系統のオノマトペ           | 105 |
| 3.1 | 意味分類と用例                | 105 |
| 3.2 | 語形による意味の重複と分担          | 109 |
| 4   | 〈ポコ〉系統のオノマトペ           | 110 |
| 4.1 | 意味分類と用例                | 110 |
| 4.2 | 語形による意味の重複と分担          | 112 |
| 5   | 隣接オノマトペに見る意味の重複        | 113 |
| 6   | まとめ                    | 114 |

|       |                                  |     |
|-------|----------------------------------|-----|
| 第3章   | 小説作品に見る和語系オノマトペと<br>漢語系オノマトペの関わり | 119 |
| 1     | はじめに                             | 119 |
| 2     | 明治期の漢語                           | 120 |
| 3     | 明治前期の和語系・漢語系オノマトペの関係             | 122 |
| 3.1   | 明治期の和語と漢語                        | 122 |
| 3.2   | 明治前期に見る和語系・漢語系オノマトペ              | 124 |
| 3.2.1 | 『浮雲』のオノマトペ                       | 124 |
| 3.2.2 | 『浮雲』周辺のオノマトペ                     | 131 |
| 3.3   | 江戸期4作品に見る漢語系オノマトペ                | 135 |
| 3.4   | 考察                               | 136 |

|       |                      |     |
|-------|----------------------|-----|
| 4     | 明治後期の和語系・漢語系オノマトペの関係 | 137 |
| 4.1   | 明治後期の和語系・漢語系オノマトペの割合 | 137 |
| 4.2   | 和語系オノマトペと漢語系オノマトペの対応 | 147 |
| 4.3   | 漢語系オノマトペの「オノマトペ」性    | 149 |
| 4.4   | 考察                   | 152 |
| 5     | 漢語系オノマトペの音韻・形態面での影響  | 153 |
| 5.1   | 静寂・沈黙を表すオノマトペ        | 153 |
| 5.2   | 静寂を表すオノマトペの由来        | 154 |
| 5.3   | 沈黙を表すオノマトペの由来        | 156 |
| 5.4   | 近世・近代における静寂を表すオノマトペ  | 156 |
| 5.4.1 | 近世のオノマトペ             | 156 |
| 5.4.2 | 近代のオノマトペ             | 158 |
| 5.5   | 近世・近代における沈黙を表すオノマトペ  | 172 |
| 5.5.1 | 近世のオノマトペ             | 172 |
| 5.5.2 | 近代のオノマトペ             | 173 |
| 5.6   | 考察                   | 178 |
| 6     | 本章のまとめと考察            | 180 |

## 第4章 小説作品に見る文章の近代化と

|       |                  |     |
|-------|------------------|-----|
|       | オノマトペの変遷         | 187 |
| 1     | はじめに             | 187 |
| 2     | 「泣く」「涙」に関する描写の変遷 | 188 |
| 2.1   | 「泣く」「涙」を表すオノマトペ  | 189 |
| 2.1.1 | 中古のオノマトペ         | 189 |
| 2.1.2 | 中世のオノマトペ         | 191 |
| 2.1.3 | 近世のオノマトペ         | 193 |
| 2.1.4 | 近代(明治・大正)のオノマトペ  | 195 |

|                              |     |
|------------------------------|-----|
| 2.2 「泣く」「涙」を修飾する表現           | 199 |
| 2.2.1 近世以前(中古・中世・近世)の表現      | 199 |
| 2.2.2 近代(明治・大正)の表現           | 202 |
| 2.3 考察                       | 205 |
| 3 「笑い」に関する描写の変遷              | 206 |
| 3.1 笑いの表現と調査範囲               | 206 |
| 3.2 笑い声を表すオノマトペ              | 207 |
| 3.2.1 中古の笑い声を表すオノマトペ         | 207 |
| 3.2.2 中世の笑い声を表すオノマトペ         | 208 |
| 3.2.3 近世の笑い声を表すオノマトペ         | 210 |
| 3.2.4 近代の笑い声を表すオノマトペ         | 213 |
| 3.3 表情・笑い方を表すオノマトペ           | 215 |
| 3.3.1 中世・近世に見る表情・笑い方を表すオノマトペ | 215 |
| 3.3.2 近代に見る表情・笑い方を表すオノマトペ    | 216 |
| 3.4 オノマトペ以外の笑いの表現            | 218 |
| 3.4.1 中古から近世まで               | 218 |
| 3.4.2 近代(明治)                 | 220 |
| 3.5 考察                       | 224 |
| 4 本章のまとめと考察                  | 225 |
| 終 章                          | 231 |
| 1 本研究の概要                     | 231 |
| 2 結論                         | 235 |
| 3 今後の課題                      | 237 |
| 引用・参考文献                      | 239 |
| あとがき                         | 251 |
| 索引                           | 255 |